

## 「子ろばに乗って」

2015年11月19日

ルカによる福音書 19章 28節～36節。イエスはこのように話してから、先に立って進み、エルサレムに上って行かれた。そして、「オリーブ畑」と呼ばれる山のふもとにあるベトファゲとベタニアに近づいたとき、二人の弟子を使いに出そうとして、言われた。「向こうの村へ行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどこいて、引いて来なさい。もし、だれかが、『なぜほどこくのか』と尋ねたら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。」使いに出された者たちが出かけて行くと、言われたとおりであった。ろばの子をほどこいていると、その持ち主たちが、「なぜ、子ろばをほどこくのか」と言った。二人は、「主がお入り用なのです」と言った。そして、子ろばをイエスのところに引いて来て、その上に自分の服をかけ、イエスをお乗せした。イエスが進んで行かれると、人々は自分の服を道に敷いた。

主イエスと弟子たちの宣教団はエルサレムに近づいてきた。「オリーブ山」の麓にあるベトファゲとベタニアに近づいた。ベトファゲとベタニアはエルサレムから2～3kmの所にある。主イエスは二人の弟子を使いに出した。「向こうの村へ行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどこいて、引いて来なさい。もし、だれかが、『なぜほどこくのか』と尋ねたら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。」主イエスは、子ろばに乗ってエルサレムに入城する計画を立てていた。その計画に応じて、子ろばをつないで用意している人がいて、貸してもらえる手はずを整えていた。誰かが子ろばをほどこくを見たら、当然「なぜほどこくのか」と問うであろう。その時「主がお入り用なのです」と答えればよい。二人の弟子たちが村に行き、言われた通り「主がお入り用なのです」と答えると、すぐに貸してくれた。

「主がお入り用なのです」という言葉が愛読句で、奉仕を依頼された時は、この言葉に倣い、すぐにお応えするという人がおられる。教会は、この信仰に立つ人々によって支えられている。主イエスをお乗せする「子ろば」の御用をしたいと言う人もおられる。ろばは小さいが力持ちで、忍耐強い家畜である。

二人の弟子たちは子ろばを引いて、主イエスの所に戻って来た。そして、自分たちの服をかけ、主イエスをお乗せした。子ろばに乗ってエルサレムに入城した時、人々は棕櫚の枝を打ち振って迎えたというので、教会ではその日を「棕櫚の日」と呼ぶ。正しくは棕櫚の枝ではなく、勝利のシンボルであるなつめやしの枝で、この日から受難週に入る。

子ろばに乗って入城するパフォーマンスには、主イエスの深い思いが込められている。旧約聖書ゼカリヤ書 9章 9節、10節の預言の成就である。「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗って来る／雌ろばの子であるろばに乗って。わたしはエフライムから戦車を／エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ／諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ／大河から地の果てにまで及ぶ。」神が遣わす真の王は猛々しい軍馬ではなく、柔和で奉仕する子ろばに乗って来る。その王は人々を救い、平和を実現する。子ろばは人々に仕える苦難、そして最終的には十字架の死を象徴している。しかし、主イエスの思いを理解する人はなく、ローマからの独立、解放を夢見る歓喜に包まれての入城であった。この日から、主イエスの孤独な闘いが始まる。(続く)